

滞在報告



分子環境解析化学領域 荒木泰介

出向先はドイツはベルリンでございます。大都市ベルリンは、著名な研究機関を多く擁しており、学術都市として活気あふれる界隈でありました。私が本事業で赴いたベルリン自由大学は、殊に、非常に広大なキャンパスを抱えておりまして、構内では人文学・社会科学・自然科学と裾野の広い学術活動が行われておりました。国際色豊かで悠々閑々とした校風は、学問を志す私たち若者にとって至福の環境であったこと、帰国後の今でも想起いたします。

さて、本事業の主な目的の一つは、表面増強赤外分光法（SEIRAS）の実験技術の習得にありました。この手法は光と物質の相互作用を、プラズモン励起を通して観測するという分光分析技術であります。サブモノレイヤー程度の膜を高感度に測定できる優れた手法であります。再現性のとれるデータを得るには、職人的な技術を要するという難点がございます。当然ながら一朝一夕で学べるはずもなく、手先の不器用な私は、殊更、習得に非常に多くの時間を費やしました。躓くことが多かった分、人一倍、重要事項を反芻しながら会得することができ、寧ろ良かったのではないかと、今ではそう実感しております。

羊飼いの少年サンチャゴの旅を題材にした小説『アルケミスト』では、「宝物を見つけるためには、前兆に従っていかなくてはいけない」という老翁の助言から、少年の旅が始まります。私もサンチャゴ同様、ベルリン滞中に於いて“前兆”を迎え入れました。俗に言う“絶好のチャンス”です。化研に帰ってきた今こそが壮大な“旅”のはじまりに打ってつけであること、心に留めて、挑戦的な研究に果敢に取り組んでまいります。

